反転する「まなざし」

――「出入幽顕」の実践論・序説――

丸山敏秋

「花を見ている 花も見ている」（陶芸家・河井寛次郎の言葉）[1]

はじめに

戦前の日本哲学の領域でよく使われた用語の一つに「全一」がある。存在するすべての物事、というほどの意味であろうか。それが「全一統体」と表現される場合、「全」はあらゆる個々の物事、「一」はそれらを一つに統合する隠れた次元を意味する。

本紀要を発刊している倫理研究所が唱導する「純粋倫理」という生活法則を支える諸原理のうち、最も根本をなすのが「全一統体の原理」である。〈全一統体とはどういうことなのかを究明したい〉――それが若い頃からの筆者の思いであり、半世紀近くに及び、色々な角度から考察に取り組んできた。

本稿もそのような営みの一環をなすものである。筆者は近年、「相即の原理」であるとか「異界と倫理」をテーマにした研究に打ち込んできた。昨年の本紀要に掲載した長文の論文「〈奇蹟〉はなぜ起こるのか」もそれら

に連なる。

そうした考察を背景にしながら、本稿では、現実世界と、それとは存在の次元を異にする「一」との交感交通を、「まなざし」（視点）の転換という事実――誰もがある状況に置かれたり、ある心境に至れば体験可能な事実――に基づいて考察する。

倫理運動を提唱し、社会教育団体の倫理研究所を創設した丸山敏雄（一八九二～一九五二）は「全一統体の原理」をテーマにした論文（『純粋倫理原論』所載）の末尾にこう書いている。

人生は、純一なルールに統一された神の演劇である。この自覚が精神革命であり、この実践が人間革命である。

そして主著『万人幸福の栞』にはこうある（第十七条）。

ここまで行きついて、人は始めて真の自由を得る。自在奔放、心の欲する所に従ってのりをこえない。幽顕に出入し、神人に優遊して、自在ならざるはない。人かと思えば神、神かと思えば人、神人一致である。

ここに人が顕界の主となる意義（いみ）が成り立つ。

「神の演劇」に目覚めた心境、「幽顕に出入」する自在の境地に至るときに、日常では意識されることの少ない「まなざし」の転換、視線の変容が起こる。それを「出入幽顕の実践論」として論じてみたい。本稿はその序説である。